

# 軍事反乱の危機を防いだ韓国

## 民主主義の新しいページを刻む日々

村山俊夫  
(ソウル市在住)

すでに詳細な報道が行われているように、年末の 12 月 3 日韓国の国会議事堂に武装した軍部隊が大挙侵入するという事態が起こった。尹錫悦大統領がテレビを通じて「唐突に」非常戒厳令を宣布してからわずか数分のできごとだった

宣布文の内容は「尊敬する国民の皆さん、私は大統領として血を吐くような思いで国民の皆さんに訴えます」という言葉で始まった。

野党は現政府の出発以降、政府の官僚に対し 22 件もの弾劾案を提出し行政機能を麻痺させており、予算処理の過程で様々な分野の予算を恣意的に削減して活動を阻害しようとしているなど、自由韓国の憲政秩序を乱し国家機関をかく乱するもので、これらを「内乱」を画策する明白な反国家行為だと断定した

その野党や労働組合、市民団体などを「国民の自由と幸福を奪おうとする破廉恥な北朝鮮追随反国家勢力」と規定し「彼らを一気に剔抉し自由韓国を守護するために戒厳令を宣布する」と述べて戒厳令の目的を明らかにするとともに、続いて戒厳司令部が発表した「布告文」には具体的な戒厳下の統制内容が明記されていた。

- 1、政治活動の禁止(各議会の活動、集会、示威など)
- 2、言論、世論の統制(政府の統制を受けた言論のみ許可される)
- 3、社会安定の維持(ストライキなどの争議禁止、特に最近問題化した医療関係者の現場離脱などは戒厳法に基づき処断する)
- 4、反国家勢力の処断(上記宣布文に規定された政党、団体など)

まさに朴正熙、全斗煥ら軍部独裁の時代に多くの人々を苦しめ、生命を奪った 70～80 年代の悪夢を思い起こさせる不吉な呪文のような言葉が並んでいたのだった。

尹政権への批判は大統領就任以来、絶え間なく続き拡散していた。2022年10月29日に起きた「ハロウィン圧死事件」では158名もの犠牲者を出しながら真相究明や責任者の処罰が十分に行われなかったことや、2023年夏の世界スカウトジャンボリーで1000名以上の熱中症患者を出したこと、プサンエキスポの誘致失敗など多くの失政がその対象に上った。外交面では理念対立に固執し、中ロなどとの関係が悪化し、対北政策では2018年に締結された「軍事分野南北協議書」を効力停止にするなど緊張関係を高潮させたことなどに批判が集まっていた。特に夫人 金健希キムゴンヒに関する様々な疑惑が大統領夫妻による「国政壟断」として集中砲火を浴びていた。2023年に起きた知人からのブランドバック収賄スキャンダルに対しては今年新年の記者会見に代わるKBS放送との単独インタビューの中で「周囲の人々に無下な態度で接することはしにくいので」と、夫人をかばう弁明で收拾を図ろうとし、その時インタビューアールとして大統領の意図に協力した功が認められた(?)パク・チャンボムはKBSの社長に推薦されたという更なる疑惑を生み出した。

## 戒厳令の夜

その夜、人々はためらうことなく立ち上がった。軍人が押し寄せるのとほぼ同時に多数の市民、労働者が国会前に集結しピケットを張ってその暴挙を阻止しようとした。国会の中にいた職員たちも必死の抵抗を試みた。ある女性議員は銃を手にした軍人に捨て身で挑み撃退する場面が映し出された。それでも707部隊と呼ばれる特殊戦部隊の兵士は玄関の窓を割って中に侵入した。彼らの目的は「反国家勢力の処断」であり大統領の言う「北朝鮮追随勢力の剔抉」だった。この不当な暴力行使を抑え戒厳令を解除するために直ちに国会議員が召集された。時間は深夜12時をまわっていた。国会議長ウ・ウォンシクが国会の塀を自ら乗り越えて中に入ろうとする姿が写真に捉えられた。

後日、国家情報院(旧国家安全企画部、情報組織)の首脳の一人であるホン・ジャンウォン第1次長の話によれば、この時尹大統領が直接「(国会議長や与野党の代表、反政府的な議員、言論人、大法院(最高裁にあたる)長などを含む)人々をこの機会に根こそぎ捕まえて処理しろ」と指示をしたという。連行先は冠岳にある防諜司令部の取調室だということは、軍事独裁政権時代に多数発生した「北のスパイねつ造事件」の再現を連想するのも難しくないだろう。防諜司令部の前身は「陸軍保安司令部」だが、映画『ソウルの春』で登場する全斗煥(映画ではチョン・ドゥグァン)が保安司令官で後に合同捜査本部長になり政権を奪取することになる。実際軍部隊が国会に侵入した同時刻に別の部隊が選挙管理委員会に入り、前回の国会議員総選挙に関するデータを保管したサーバーなどを写真撮影する姿が監視カメラに捉えられていた。つまり現在野党がはるかに多数を占める国会が不正選挙を通じて作り出されたもの

だという背景を作り出そうという狙いがあったと見られる。また今回の戒厳事態を企画したと言われる国防部長官 キム・ヨンヒョンが1週間ほど前に「汚物風船」が飛来したらただちに撃墜し、飛ばした場所(北朝鮮国内)に攻撃を行い「局地戦」を誘発することを指示したが合同参謀本部議長がその指示を拒んだために実行できなかったということも明らかになった。結局、北朝鮮との戦闘状態を作り出すことで戒厳令が正当化され、さらに反政府的な人士を北朝鮮と結びつけることで反対勢力を圧殺するという恐怖政治の実現を計画していたことが徐々に明るみに出つつある。

午前1時、緊迫の時が流れた後、議決が行われた。出席議員は190名。内18名は与党<国民の力>の議員で代表のハン・ドンフンも含まれていた。その結果出席議員全員一致で戒厳令解除が可決された。国会議長が「戒厳解除要求案可決によって戒厳令宣布は無効となった」ことを宣言した。憲法第77条5項には「在籍議員の過半数(現在は150名)の賛成で解除を要求することができ、大統領は決議を受けて即時解除しなければならない」となっている。見守る市民の中から歓声が上がった。おそらくテレビに釘付けになっていた視聴者たちも同じ思いだっただろう。だが戒厳法によれば戒厳令の解除は国务会議(日本の閣議にあたる)の審議を経て実現するという条項があった。それを悪用して会議を開かず戒厳令を続けるのではという疑念を払しょくすることができなかった。尹大統領ならやりかねないことだったからだ。

午前4時32分。再び尹大統領が現れ、国会の議決を受け入れ戒厳令が解除されたことを発表した。眠れぬ夜を明かした市民にようやく安どのため息がもれた。軍人との流血の衝突が起きることなく、一人の死傷者も出さずに「戒厳令の夜」は夜明けとともに終わりを告げた...

### 大統領弾劾の日まで

翌日から市民や労働者の動きが、堰を乗り越えた大河の水流のように街にあふれた。国会前にも集結して軍の暴挙に立ち向かった「民主労働組合総連合(民主労総)」は午前8時、記者会見を開き尹大統領が退陣するまで無期限のゼネストに突入することを宣言した。ソウルでは午前9時に光化門広場に集合し、各地域ではそれぞれの定めた場所に集まり決起大会を開くことが確認された。

学生たちの動きも相次いだ。高麗大学学生が「内乱罪 尹錫悦即刻退陣」を叫んで構内デモを行ったのを始め、ソウル大学生総会でも2500名の学生が出席する中、「尹錫悦退陣決議」を可決した。これに梨花女子大、淑明女子大、東国大学などソウル地域の大学のみならず地方でも学生たちの呼応が加わった。若者たちが「保守化」しているというこれまでの評価を打ち破るように、各地で20代、30代の積極的な参

加が目をひいた。

全国すべての地域で違法戒厳宣布に抗議するために立ち上がった市民の声も伝えられる。かつて朴正熙政権時代、1979年に起きた<釜馬事態(プサンと馬山の市民が激しい反政府デモを行い政府が残酷な弾圧を加えた事件)>を経験したイ・チャンゴンさん(62)は「いつの間にかあの時の現場に自分がいるような気がしました。当時自分は警察に連行され過酷な拷問を受けたりしているところへ、着剣した軍人たちが警察の正門を足で蹴って壊しながらなだれ込んで来た姿。瞬間その記憶の中にまた自分が追いやられていたんです」

独裁政権の無慈悲な弾圧の記憶が今なおトラウマになっている人が決して少なくない。空挺部隊の殺戮にさらされた光州市民の脳裏にはあの時の市内の状況がまざまざと甦ってきたという。70代のある市民は「テレビで銃を持った戒厳軍が国会議事堂の窓を壊して中に入る姿を見ました。1980年5月を経験した人間としては全身に震えが起こり、怒りがこみ上げるのを抑えることができませんでした」

戒厳令が解除された翌日になっても、大統領は自分の過ちを国民に謝罪するために現れることはなかった。代わりに大統領室から「尹大統領は今回の戒厳が暴走する野党に対する‘警告’という性格のもので不可避の選択だった」という話が伝えられた。当時、戒厳令下でも前線に服務せざるを得なかった兵士たちは、家族に遺書を書かされ、恐怖と寒さに震えながら南北の一触即発の危機に備えていたという。「警告性の戒厳令」などというものがこの世に存在するのだろうか。数百名の軍人を国会に投入し、北朝鮮との局地戦まで挑発しようとした尹錫悦とその政府に対し国民の怒りはとどまることを知らなかった。

国会は12月7日の午後に「大統領弾劾訴追案」を上程する方針を固めた。学生、市民、労働者はその日に向けて連日大規模な集会や糾弾会見を開いて民主主義を自分たちの力で守り抜くことを訴えた。尹錫悦が大統領でいる限り、第二、第三の戒厳令が発せられないと誰も保証することができなかったからだった。

その日、7日の午前中、4日の未明以来沈黙を守ってきた大統領が国民に向けて談話を発表することが伝えられた。前日に与党の院内代表で尹錫悦の側近であり戒厳事態の発生の中で大きな役割を果たしていたチュ・ギョンホと、与党代表ハン・ドンフンが相次いで大統領と面談を重ねていたことが伝えられた。戒厳解除に賛成票を投じていたハン・ドンフンはそれまで「尹大統領の早急な執務停止が必要」などと‘弾劾賛成’を匂わせる言葉を繰り返し、国民を欺瞞し弾劾推進陣営をかく乱する態度を

見せていたが、大統領自身が何を語るのか誰もが注視しないではいられなかった。

午前 10 時に始まった謝罪談話の内容は戒厳宣布の理由が状況の悪化に切迫感を感じていたためだったが、国民を不安にし心配をかけたことは深く謝罪し、今後のことは自分の任期を含め「わが党に一任する」とこと、二度目の戒厳令はありえないという趣旨で 2 分にも満たない簡単なものだった。8 年前の朴槿恵の対国民談話が思い出された。あの時はそれでも自身の進退問題については「国会に任せる」と表現したが、今回は政府与党が今後のことを取り仕切るよう委任すると言っていた。野党の存在を完全に無視し、もともと戒厳宣布の陰謀を見て見ないふりをし、国务会議に出席して賛成した閣僚を含めた政権与党は、その権力を決して手放さないという宣言を固唾をのんで見守る国民に浴びせかけたのだった。しかも瞬間薄ら笑いを浮かべた表情は「謝罪」など全く心中にはなく、与党「国民の力」に自分が弾劾されてみじめな末路をたどることのないよう、うまくやることを権力の移譲と引き換えに約束させること以上でも以下でもなかった。

<国民への謝罪談話>

尊敬する国民の皆さん

私は 12 月 3 日夜 11 時を期して非常戒厳を宣布しました。約 2 時間後の 12 月 4 日午前 1 時頃、国会の戒厳解除決議に従い軍の撤収をう指示し深夜の国务会議を経て戒厳を解除しました。

このたびの非常戒厳宣布は国政の最終責任者である大統領としての切迫感から出たものでした。しかしその過程で国民の皆さんにご心配をおかけしました。大変申し訳なく驚愕されたであろう国民の皆さんに心からお詫びいたします。

私はこのたびの戒厳宣布に関連した法的、政治的責任問題を回避する考えはありません。

国民のみなさん。

再び戒厳令が発動されるだろうという話がささやかれています。はっきりと申し上げます。第二の戒厳令なるものは決して発令されることはないでしょう。

国民のみなさん。

私の任期の問題を含め、今後の政局の安定方案はわが党に一任いたします。

これからの国政運営はわが党と政府が共に責任を持って遂行します。

午後1時すぎ。国会の前にはすでに多くの人々が集まろうとしていた。地方から来る人々を乗せた 何十台ものバスが国会大路から汝矣島ヨイド公園へと迂回しながら、議事堂のドームが見えるところに停車しては人々を降ろしていった。皆のまなざしはひたすら国会会議場に向いていた。誰かが寒空に突き刺さるようなシュプレヒコールを叫ぶと、それに続いて参加者が一斉にこぶしを高く振り上げて憤怒の声を上げた。

「内乱首魁 尹錫悦を逮捕せよ！」「戒厳統治 画策した 尹錫悦は退陣せよ！」

地下鉄の出口からもひっきりなしに人が吐き出され、道路を埋めつくしていった。

濟州島から釜山から、光州から清州から、江陵から原州から、大邱から大田からおそらく数十万の市民が 弾劾の瞬間に立ち会うためにつけてきた。しっかりと覚悟はできていた。ここで再び軍人が前を塞ごうと、自分たちの信念を踏みにじることは誰にもできないと。

午後5時に先に議決が行われた「金健希特別検事法」はわずか2票差で否決された。大統領夫人の数々の疑惑にメスを入れるため、特別検事を任命するための法案はこれまで2回、大統領の拒否権によって廃案となり3度目の提出だった。ところがこの結果を見届けた与党議員が一斉に本会議場から退場し始めた。それは続いて議決が予定されていた「弾劾訴追案」の確実な否決のために定数不足による廃案を狙った行動だった。裏を返せばもし会議場に残って採決に臨めば、賛成票を投じた議員が出ることを憂慮していたことが透けて見える。無記名投票だったため「裏切者」が誰かを特定することが困難だったからだ。

議長は与党議員の名を一人一人読み上げ粘り強く復帰を待った。集会場でもこれに答えて参加者が口にもしたくない議員の名を叫び「議場に戻りなさい」と訴えた。午後9時20分。ついに国会議長は法案評決の不成立を宣言した。無念の思いにその声は震えていた。

参加者の間から深いため息と与党議員を非難する声が噴き出したのは言うまでもない。だが誰も絶望などはしていなかった。野党は次の週から毎週、弾劾訴追案を出し続けることを確認した。そして市民たちのスローガンに「尹錫悦を逮捕せよ！」と共に「内乱共謀犯『国民の力』を解体せよ！」が加わった。民主主義を前進させる次の闘いが始まった瞬間でもあった。

帰りの電車の中では誰もが無口に見えた。疲れ切った表情だった。ふとある人が隣に座っていた女性に「今日はやつらに負けてしまったと思いますか」と尋ねた。するとその女性はしっかりと顔を上げて「私たちが負けた？議場に背を向けて出てきたのはあいつらだったでしょ？負けた奴が背中をみせるもの。私は絶対背中を見せなかった！」その答えに周りの乗客が一斉に拍手をしたという話が伝えられた。

一刻一刻、民主主義を進化させ続ける韓国の人たちの行動から目が離せない。

(2024年12月10日記)

## 続報

### 12月11日の報告

今週中に大きな動きがありそうです。

ひとつは土曜日に予定されている二度目の大統領弾劾決議。もう一つは戒厳宣布をめぐる捜査の進展で、これには尹錫悦の逮捕がいつかという関心があります。

決議についてはレポートでお伝えしましたように与党の議場退場＝議決妨害という行動によって採決が流れたことについては大きな批判が巻き起こり「政党の解散請願」まで出ると言う事態に発展して、さすがに与党としても同じ方法は取れなくなって次の採決には出席せざるを得ない状況になっています。

もうひとつのクーデター未遂事件への捜査の問題ですが、これも報道されているように首謀者と目されている国防長官が緊急逮捕され、大統領逮捕も近いといった観測が流れましたが、現在の捜査体制が一元化されておらず、検察、警察（国家捜査本部）、高位公職者犯罪捜査処という3つの機関がそれぞれ勝

手に動いていて、最近さらに既存の機関から独立した「常設特別検事」というのが国会決議（野党主導）で発足し、今日は国会議長が「国政調査権」を発動して関連者を国会に出頭させ質疑応答を国民の前に明らかにするという方針を出しています。

一言でいえば捜査が混乱しつつあるし、その中でも国防部長官を緊急逮捕した検察が一步リードしているというのが問題視されています。なぜなら元検事総長だった尹大統領の息がかかった人物が検察にはいっぱいいるし、尹の政治を「検察独裁」と呼んでいるようにこれまで様々な場面で尹が検察を利用して政敵を攻撃し都合の悪い状況を反転させるのに大きな役割を果たしてきたのが検察だからです。だからいくら一生懸命捜査しているように見せても結局尹のクーデター未遂の証拠隠滅と最大限の失地回復が彼らの目的だろうと判断しています。ここで事件の捜査を検察から別の機関が取り戻さなければというのが切実な状況です。

そこで今考えるのは現在進行している状況をどう見るかも重要ですが、結局これらは12月3日のクーデターが失敗に終わったことから生まれた状況で、もし成功していたらこちら側の行動もまったく違ったものにならざるを得なかった。そしてそれも単なる仮定ではなく将来また起こりうる出来事として（日本にも）十分な吟味、検討が必要ではないかと思っています。

つまり今回の事態から私たちが教訓として残すものは「なぜ失敗したのか」「成功したらどうなったのか」ということがむしろ尹錫悦の行く末を占なうようなことよりずっと大事なのではないかと考えています。

結論から言えば国会で軍の侵攻に素手で立ち向かった市民（議員も含む）と、良心に従って命令に服従しなかった軍や警察の判断を重要だと考えます。クーデター前に国防部長官が北朝鮮との局地戦を誘発しようとする無謀な指示を出しても拒否した軍幹部がいたという事実を含めてです。

(了)